

慈眼堂

慈眼堂は、十七世紀初頭にこの輪王寺を復興させたことで有名な、輪王寺第五十三世貫主・天海大僧正（西暦 1536-1643 ごろ）の終の場所です。日光山内の施設の多くは、彼の功績だとされています。

その長いキャリアを経て、天海は僧侶の高位に登りつめ、1603 年に日本を統一する徳川家康（1543～1616）とも親密な関係を結ぶようになります。1613 年に家康は天海を日光の責任者に任じ、そこに彼（家康）の終の住処を準備するよう命じました。天海はまた、家康の戒名である“東照大権現”という名を選んだ人物でもあり、東照宮を創建して家康の遺体を安置したのです。天海が 108 歳という高齢で死去すると、彼には“慈眼”の諡が与えられることとなります。これが慈眼堂の名前の由来です。聖人の中でも特に偉大なものだけに与えられる称号“大師”を、時の天皇は天海に授けました。日本の全歴史の中で、この称号が天皇から授けられたのは天台宗の中では五人だけである。

この小道の終わりには拝殿があり、参拝客は天海に祈りを捧げることができます。小道のそばに並ぶ小さな建物には、彼が生涯収集した経典と重要な資料が保管されています。天海の墓所は拝殿の後ろにあります。階段を上がり、拝殿の隣の通路に沿って歩くと、五輪の塔を見つけられるでしょう。（5 つの層は）どの層も密教の根本的な要素を意味しています。下から上の順番でそれぞれ、“地”、“水”、“火”、“風”、“空”という意味です。